

## 2026 年度 事業計画書

当財団は、創設者 安藤百福の「食とスポーツは健康を支える両輪である」という理念のもと、青少年の健全な心身の育成を目的にスポーツや自然体験活動を支援するとともに、食文化の振興をはじめ、発明心の涵養、食育の促進を担っています。

スポーツや自然体験活動の魅力発信や取組みの支援に加え、食育や発明記念館での体験を通じて、青少年が達成感を積み重ね、自己肯定感や自活力を育めるよう支援します。こうした体験の継続が、社会性や自律性の醸成につながると考えています。

2025 年には、新たに社会福祉事業「ヤングケアラー支援事業」をスタートしました。地方自治体等と連携し、栄養バランスの取れた食事の支援を提供する取組です。これにより家事負担の軽減と、福祉サービスなどの行政支援につなげる効果が期待でき、学習や友人との交流など、青少年期に必要な環境づくりに貢献します。

当財団は、5 つの公益目的事業を中心に社会貢献活動を推し進め、社会の発展と人々の生活の質(QOL)の向上に不可欠な役割を果たすとともに、青少年のウェルビーイング向上を図ります。

### <公益目的事業>

- (1) 公1. スポーツ支援事業
- (2) 公2. 自然体験活動支援事業
- (3) 公3. 食文化振興事業
- (4) 公4. 発明記念館運営事業
- (5) 公5. 社会福祉事業「ヤングケアラー支援」

### <収益事業等>

- (1) 収1. 施設賃貸

### <公益目的事業>

#### ■公1. スポーツ支援事業

##### 1. 小学生陸上競技大会等の後援事業

###### ・第42回全国小学生陸上競技交流大会の事業後援

子どもたちにあらゆるスポーツの基本である正しい走法を学ばせること、スポーツを通じて友情を育んでもらうことを目的に、全国の小学5、6年生を対象とする陸上競技大会の都道府県代表を決定する地方大会と、全国大会を後援します。

主 催：公益財団法人日本陸上競技連盟

実 施 日：① 地方大会 2026年5月～10月  
② 全国大会 2026年11月21日(土)～23日(月)

場 所：① 地方大会 47都道府県の競技場  
② 全国大会 東京・国立競技場

公益財団法人日本陸上競技連盟と協議し、発育・発達時期における過度な練習、成績至上主義に陥ることがないように、指導者研修会や懇親会を主催し、指導者の教育を推し進めるとともに、子どもたちの意欲、才能を開花させる取り組みとして、複数の陸上種目に取り組むコンバインド種目を取り入れています。

また、憧れのトップ選手や、ともに切磋琢磨した都道府県選手との交流を図るフレ

ンドシップパーティーを開催するなど、子どもたちの記憶に残る大会となるよう夢の舞台を演出します。

全国大会の後援に加え、地方大会に参加する選手を対象に、成長期に必要な栄養素や食事の重要性を説いた冊子を新たに作成・配布し、競技力向上だけではなく、小学生アスリートの心身の育成を図ります。

## 2. 少年少女陸上競技指導者表彰「安藤百福記念章」表彰事業

子どもたちの健全な心身の育成には優れた指導者の存在が不可欠であるとの考えから、小学生の指導者を顕彰する少年少女陸上競技指導者表彰「安藤百福記念章」を、47都道府県から推薦された指導者に贈呈しています。第42回全国小学生陸上競技交流大会の開催時に、これまでの功績を称えるとともに、今後一層の活躍を期待して表彰します。

## 3. 「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」支援事業

2015年9月、当財団と公益財団法人日本陸上競技連盟は、若手アスリートの海外挑戦を支援する「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」をスタートしました。

世界のトップ選手が集うトレーニング環境に飛び込み、現地のコーチに指導を受け、切磋琢磨する中で大きな刺激を受けながら、練習できる機会を提供します。本プロジェクトを通じて、トップアスリートとして求められる資質を身につけ、将来、国際大会におけるメダリスト誕生をサポートします。

＜支援内容＞・対象：オリンピック等国際大会でメダル獲得を志す満16歳以上の企業に所属していない個人

・内容：旅費、遠征費、コーチフィー等を助成

## 4. スポーツ全般におけるジュニアアスリート育成の後援事業

公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会に加盟している競技団体を対象とし、全国的な組織またはそれに準ずる団体を通して、ジュニアアスリート育成を支援することで、青少年の健全な心身の育成を図ります。

### (1) 安藤財団グローバルチャレンジ Jr. テニスの後援

47都道府県の各テニス協会から推薦のあった11歳の男女1名を、年3回、東京・大阪・地方等で開催されるキャンプに招待します。ジュニア時代から世界での活躍を意識し、国内トップクラスのコーチによるオンコートでの指導だけでなく、オフコートでも真のチャンピオンを目指すために必要な要素（心・技・体・知・徳）をジュニア期から学ぶ「チャンピオン教育」を実施します。あわせて、アジアからも選手を招待するなど国際交流を図ります。

また、本キャンプ参加者、経験者より選抜した男女数名を国際大会、海外遠征に派遣し、将来のタレント発掘と育成体制の構築を目指します。

主催：公益財団法人日本テニス協会

内容：キャンプ運営費、選手宿泊・交通費、国際大会遠征費等を支援

### (2) バスケットボール U18 リーグ戦の後援

U18世代バスケットボール界では、高校の部活動、クラブチームの活動が区別されており、相互交流が少ないことが育成・普及面での課題となっています。トーナメント戦と異なり、リーグ戦は一定の試合数が確保されるため、多くの選手に出場

機会が生まれます。対戦相手や日程が事前に分かることで、スカウティングや実戦を想定した練習が可能となり、練習の質や試合中の対応力向上が期待できます。

本リーグ戦は、Bリーグのユースチームも参加するなど、部活動・クラブ活動の垣根を超えた唯一の大会として、日本バスケットボール界の底上げを図ります。指導者や選手からは「ハイレベルの試合を数多く経験できる」などの評価をいただいています。

上位リーグ、下位リーグの入替え戦などを通じてリーグ戦文化を育み、強化・育成と普及の両立を目指します。

リーグ戦の在り方や支援については、日本バスケットボール協会との協議を継続してまいります。

主催：公益財団法人日本バスケットボール協会

内容：リーグ戦の選手遠征費、大会運営費等を支援

### (3) 車いすテニス ジュニア体験プログラムの支援

当財団は、一般社団法人 日本車いすテニス協会と連携し、スポーツにふれあう機会が乏しい障がいのある子どもたちが、車いすテニスの体験を通じて、自分らしく生きられる世界を目指し、社会への参加促進を図ります。

日本では、車いすテニスの競技力が世界トップクラスであり、社会認知度も高いことから、障がいのある子どもたちが気軽に体験できるスポーツと考え、当財団では、体験レッスン料やレッスンで使用する競技用車いすの購入を支援します。将来的には、車いすテニスをきっかけに他のパラスポーツにも挑戦できる環境を整え、更に健常者と共にプレーする機会を創出し、公平性や相互理解を広め、争いのない世界の実現を図ります。

主催：一般社団法人 日本車いすテニス協会

内容：・体験レッスン料の支援

・競技用車いす購入支援（一般社団法人 日本車いすテニス協会に寄贈）

## 5. 公立中学校部活動における地域展開支援事業

国は、少子化が進む中、生徒がスポーツや文化芸術活動に継続して親しむことができる機会の確保、教員の負担軽減、指導者の専門性などの課題解決のため、運動部活動の地域展開に向けた環境の一体的な整備を、段階的に進めています。これまで学校単位で部活動として行われてきた生徒の自主的・主体的な参加によるスポーツ・文化芸術活動を、地域全体で関係者が連携して支え、豊かで幅広い活動機会を保障するというものです。

安藤財団では、公益財団法人日本陸上競技連盟、公益財団法人日本バスケットボール協会と連携し、部活動の意義の継承・発展、新しい価値の創出を図り、スポーツに継続して親しむ機会の確保を目的に、より良い指導を提供できる指導員の育成を支援します。

- ・指導者基礎ナレッジ研修映像の開発・無償貸し出し（地方自治体等を対象）
- ・競技指導者資格の取得促進

## ■公2. 自然体験活動支援事業

「自然とのふれあいが子どもたちの創造力を豊かにする」という考えのもと、青少年の健全な心身の育成を目的に、子どもたちの自活力を育む自然体験活動の普及と活性化を図る次の事業を推進します。

## 1. 「安藤財団 自然体験企画コンテスト 2026」の実施

本コンテストでは、自然体験活動にとって大切な「企画力」の向上を図るために、全国からユニークで創造性に富んだ自然体験活動の企画案を公募し、選考の上、ユニークで創造性に富んだ企画を立案した 50 団体に実施支援金を贈呈します。更に支援団体から提出された実施報告書を審査し、優秀団体を表彰しています。

2002 年、「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」としてスタートした本事業ですが、名称を変更し、更なる周知を図ってまいります。

・表彰式：2027 年 1 月 30 日(土)

## 2. 安藤百福センター事業

2010 年 5 月、子どもたちの自然体験活動を推進するための人材育成や、アウトドア活動の普及を目的として、「安藤百福記念 アウトドア アクティビティセンター」（略称：安藤百福センター）を長野県小諸市に設立しました。コロナ禍では、国民の心身の健康の悪化、子どもたちの自然体験活動の減少などを受け、アウトドア活動への関心が高まりました。

当財団では、子どもたちの自然体験活動のツールとして、また、歩く山旅の普及に向け、沖縄から北海道をつなぐ「JAPAN TRAIL」構想（特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 提唱）を支援しています。「JAPAN TRAIL に立てば日本が見えてくる」をテーマに、豊かな自然と歴史、文化を再発見できる新しい「歩く旅」として、安藤百福センターを拠点に、当財団が普及・広報活動を担い、本支援を通じて、国民の心身の健康、青少年の自然体験機会の創出、環境保全意識の向上等に寄与してまいります。

<事業内容>

### (1) 自然体験活動振興事業

子どもたちを身近な自然に案内する指導者の養成や、自然体験への興味を喚起する講座・セミナー等を実施し、自然体験活動の更なる普及と底辺の拡大を図ります。

- ・安藤百福センターおよび周辺フィールドでの各種講座等の開催
- ・自然体験活動に係るシンポジウムの開催
- ・小諸ツリーハウスプロジェクト 2026（春・秋）

### (2) ロングトレイルの普及と安全対策事業への支援

子どもたちの自然体験の主な活動場所は、山・川・海や身近な森林、キャンプ場が中心であり、どのフィールドでも「歩くこと」が基本となります。青少年教育の有効なツールのひとつとして考えられるロングトレイルの普及・振興のための事業や、子どもたちが安心して自然体験が楽しめるよう安全対策事業を支援し、自然体験活動の更なる振興、活性化を図っています。

- ・「JAPAN TRAIL」提唱事業への普及、広報活動支援
- ・「ロングトレイルシンポジウム」開催支援
- ・国内外ロングトレイルの情報収集と発信、運営団体との交流支援
- ・登山等の安全対策事業への支援

## 3. ホームページ「安藤財団 自然体験企画コンテスト」の運営

2002 年より運営していた自然体験活動に関する情報掲載のホームページ「自然体験.com」を全面リニューアルし、「安藤財団 自然体験企画コンテスト」として 2025 年 12 月より新たに運営を開始しました。

自然体験企画コンテストの募集、支援団体の活動報告や表彰式の内容を発信するととも

に、過去表彰団体の指導者に対するインタビュー記事を掲載し、表彰企画や自然体験活動への思いなどを深掘りして発信します。あわせて、優秀な活動事例を紹介することで、自然体験活動の魅力を広く伝え、裾野拡大を図ります。

・ URL <http://www.shizen-taiken.com>

### ■公3. 食文化振興事業

#### 1. 食創会「第31回安藤百福賞」表彰事業の実施

新しい食の創造を推し進め、食品産業の発展に貢献することを目的に『食創会』を主宰し、食科学の振興並びに新しい食品の開発に貢献する独創的な基礎研究、食品開発、ベンチャー等を表彰する「安藤百福賞」表彰事業を行います。

・ 表彰式・記念講演会 2027年3月9日(火)

#### 2. 食科学の進展に寄与する学生への「安藤百福 Scholarship」奨学支援事業

日本には、さまざまな奨学金制度があるものの、大学院生に特化した奨学金制度は十分ではなく、学費や生活費をアルバイトや仕送りに頼る学生が少なくありません。コロナ禍では、こうした学生たちの窮状が浮き彫りになりました。経済的な理由で大学院進学を断念したり、休学・退学を余儀なくされると、将来の研究者や高度専門人材、ひいては新たなイノベーションの担い手を失うことにもなりかねません。

当財団は、食科学のイノベーションを停滞させないために本奨学支援事業を2021年から開始しました。食科学の進展に寄与する大学院生100名に、年額100万円の奨学金を給付し、食文化の向上、振興を担う将来の人材の育成を図ります。

#### 3. 食科学分野「安藤財団国際奨学金～食科学フェローシップ」奨学支援事業

今般、食科学の対象は食品・健康科学にとどまらず、感覚・脳科学、再生・医療工学、心理・行動学、ロボティクス・センサー技術、データサイエンス・AI情報学、経済・行動学などの領域を融合する新食科学の国際的潮流が誕生し、急速に進歩発展しています。

具体的なテーマとしては、健康長寿の実践、ウェルビーイングな社会変革、持続可能な食糧生産、新食糧資源の開発などの国際的社会課題に対応する食科学研究が期待されています。

一方、日本の新食科学領域の研究は大きく遅れており、日本の食科学領域の博士課程の在籍者数も激減しているのが現状です。

当財団では、これからの食産業の発展には食科学領域の国際的研究者の育成が急務であると考えています。そこで、食科学分野を牽引することが期待される若手研究者が、海外の大学、国際機関において研究に没頭してもらえるように、「安藤財団国際奨学金～食科学フェローシップ」奨学支援事業を2026年度に創設し、大学等へ事業案内するとともに、2027年度より奨学支援をスタートします。

・ 支援者数 若干名

・ 支援内容 海外の大学、国際機関における研究費、生活費等

#### 4. 「食分野における主観的ウェルビーイング指標開発」調査研究事業

WHOは、「健康とは、身体的・精神的・社会的にウェルビーイングな状態」と定義しています。ウェルビーイングは、客観的な側面と主観的な側面に分かれており、特に食分野

における「主観的ウェルビーイング〈満足度・幸福度〉」について基礎となるデータの蓄積が乏しく、革新のための知見が足りない状況です。

当財団は、公益財団法人 Well-being for Planet Earth と連携し、食文化の向上に資する研究や開発につながる「食分野における主観的ウェルビーイング指標開発」調査研究事業を、2022年にスタートしました。

#### <事業内容>

##### (1) 食とウェルビーイングの関係性レポートの発表

2023年、第1回研究調査「Recipes for Wellbeing Report」を公表し、「食」は健康だけでなく「ウェルビーイング」に大きく関係することを世界で初めて明らかにしました。第1回研究調査で定義した「Food Wellbeing Index」と、国際的調査会社 Gallup が行う世界最大の世論調査「GALLUP WORLD POLL」で得られた「主観的ウェルビーイング」を測定する指数「Life Evaluation Index」を掛け合わせることで、「食」と「主観的ウェルビーイング」の関係性を分析し、2025年1月、「食」と「ウェルビーイング」の強い関係性を改めて立証するとともに、第2回研究調査「Nourishing Wellbeing」を公表しています。

今年度は、2025年度に行った第3回調査結果を取りまとめ、公表します。

#### ・調査概要

目的	「食分野における主観的ウェルビーイング指標開発」調査研究を通じ、日本をはじめ世界の研究者、開発者、起業家の研究、開発を促し、食文化や関連政策の向上、人々の健康改善につなげ、多くの人々が幸福を享受できることを目的とする。
調査	米国 Gallup 社が行う世界最大の世論調査「GALLUP WORLD POLL」において、15歳以上を対象に1ヶ国あたり約1,000人、世界人口の99%を代表する約150カ国で調査を実施する。
安藤財団の役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「食」の満足度について、当財団が設問を策定し、Gallup 社に調査を委託する。</li> <li>・調査収集したデータを広く公開する。</li> <li>・専門家数名によって構成された検証委員会を設置し、本事業が適切かつ有意義に実施されているか評価する。</li> </ul>

##### (2) Food Wellbeing Index の公的機関での活用推進

本調査研究事業で開発した「Food Wellbeing Index」が国内外の公的機関における調査研究で活用されることを目指し、大学等の研究機関をはじめ、行政や国際機関との連携を推進します。世界的にも画期的な本指標を公的機関が活用することで、食とウェルビーイングに係る取組みを他機関にも広げ、子どもたちの健全な成長、健康の増進に寄与します。

また、本指標の活用推進にあたっては、指標に基づいた取組み（食支援、食育プログラム等）を国内外で実践し、その有効性を検証・公表することで、関係機関における導入・展開を促します。

##### (3) 学校と連携した食育活動の調査研究

「食とウェルビーイングの関係性レポート」の調査結果を踏まえ開発した食育プロ

グラム「Teaching Kitchen」を基に、食育に力を入れる地方自治体と連携し、学校における食とウェルビーイングに係る活動を後押しします。先進的な事例を生み出すことで、第4期教育振興基本計画において示されている「ウェルビーイングの向上」に寄与する取組みを全国に広げることを目指します。

#### ■公4. 発明記念館運営事業

2つの体験型食育ミュージアム「安藤百福発明記念館」（大阪池田、横浜）を通して、子どもたちに「発明・発見の大切さ」や「クリエイティブシンキング＝創造的思考」など安藤百福の思いや考えを伝えています。

国内外多くの方々にご理解いただけるよう多言語による展示案内等の充実に注力するとともに、安心してご来館、ご体験いただける仕組みづくりを構築してまいります。

##### 1. 安藤百福発明記念館 大阪池田（池田市、以下「池田記念館」）

1999年11月に開館した池田記念館では、「人間にとって一番大事なのは創造力であり、発明・発見こそが歴史を動かす」という安藤百福の考えに基づき、新しい食文化となったインスタントラーメンの発明の歴史展示や体験工房など、体験型食育ミュージアムを運営します。

##### 2. 安藤百福発明記念館 横浜（横浜市、以下「横浜記念館」）

2011年9月に開館した横浜記念館では、「クリエイティブシンキング＝創造的思考」をコンセプトに、安藤百福の言葉や思考、行動の本質を現代アートの手法で表現し、世界に通じる新しい食文化や産業を生み出す原動力となった安藤百福の自由な発想、創造的な考え方を体感でき、広く子どもたちの「創造力」や「発明心」を育む活動を展開し、発明・発見の大切さを伝えます。

#### ■公5. 社会福祉事業「ヤングケアラー支援」

昨今、少子高齢化や核家族化の進行に伴い、ヤングケアラーの存在が注目されています。ヤングケアラーとは、“本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っているこども・若者”を指します。彼らは、親や祖父母の介護や、兄弟姉妹の世話や家事を担うことが多く、享受できるはずの、勉強に励む、部活に打ち込む、将来に思いを巡らせる、友人との交流などの時間を奪われがちです。2024年に法改正があり、ヤングケアラー支援が強化されましたが、自治体や民間による取組みはまだ緒に就いたばかりです。

そこで、当財団では、ヤングケアラーの負担を軽減し、健全な成長を促し、社会に参加できる支援体制を構築することを目的に、次の2つの事業を創設します。

ヤングケアラーに対する社会的認知度を高め、多様な支援の活性化につなげます。

##### <事業内容>

###### (1) ヤングケアラー食支援事業

ヤングケアラーにおいて、食事の準備（買い出し、調理、片付け）は時間的に大きな負担となっています。また、栄養や調理に関する知識が乏しく、栄養不足のリスクが高い傾向が見られます。そこで、食事の手間軽減と栄養バランスのサポートを行うことで、負担を軽減し、健全な心身の育成を支援します。

・実施概要

対 象	18歳未満を中心に30歳未満までのヤングケアラーが属する世帯 ※地方自治体等がヤングケアラーとして支援すべき対象としたもの
支援食	栄養バランスのとれた加工食品を中心とした最適化栄養食等
募 集	全国の地方自治体やヤングケアラー支援団体と連携し、各団体経由で募集

なお、ヤングケアラー世帯に限らず、ひとり親家庭等の世帯においても共通する課題が生じやすい傾向があります。そのため、2026年度は、支援の対象拡大も見据え体制の整備を進めます。

(2) ヤングケアラー支援団体表彰事業

全国で実施されているヤングケアラー支援について、特に優秀な取組みを表彰し、広く周知することで、地方自治体や支援団体間の情報交換の活性化、好事例の横展開による拡大、支援に関するモチベーションの向上を図り、ヤングケアラーの全国的な支援強化につなげます。

・表彰式：2026年12月

<収益事業等>

■収1. 施設賃貸および物販の業務受託

当財団が所有する発明記念館（池田記念館、横浜記念館）の一部を、物販コーナーとして賃貸します。本事業による収益については、公益目的事業を行うために充当します。

以上